

牧師室から (2022.3.6)

最近、父のこともあって、緩和ケアについて再考している。牧師として、今までに何人かの最期をみとってきたが、実際に身内のものをケアすることとなると、どのように看取るかについて、医師、看護師、ケアマネジャーと相談して決めていかなければならないことも多く、なかなか大変であることが分かった。いずれにしても大事なものは、痛みのないこと、摂食と排泄がスムーズにできること、そしてできるだけ日常が保てることそして何か没頭できることがあるとよいということだと思った。

幸いに、この期に母が洗礼を勧めたところ、父が受け入れたことは私共にとって安堵となっている。ただこれから残された時間で、どのように信仰を養っていけばよいかを考えている。病気のため、教会の礼拝にも行けず、また目や脳の衰えから聖書を通読するというのも困難である。勿論中心的な教義や教理の学びは大切だと思うのだが・・・

先日のオンラインによる宣教協議会の講演の中で、講師の近藤勝彦先生がご自身が70代後半になり、大病を患い「ピークアウト」となった今、キリスト教の精神を伝えることを考えている、と言われたことが心に残った。では「キリスト教の精神」とは何であろうか。

父は、お会いしたことがない海老名教会の皆様とのお交わりを与えられ、祈られていることが慰めと励ましになっている。教会における主の愛の交わりというのは、キリスト教の精神の一つであると実感している。

(鈴木淳一牧師)